

出産 保育 介護

下屋根の 日常 支え合う

ぼっこ助産院の外観
高松市春日町



高松市春日町に、出産、保育、介護を一つ屋根の下で行う助産院がある。性教育の講演を全国で続けている助産師の山本文子さん(62)が今年2月に開設した「ぼっこ助産院」だ。全国的に珍しい試みで、「あらゆる世代が大家族のように支え合う場所」を目指している。(駒井匠)

高松「ぼっこ助産院」

助産師が保育室から連れてきた赤ちゃんに、91歳の女性がほほえみかける。「いい子ちゃんね」「だっこしてみよう?」「まあ、何十年ぶりかしら」。女性も職員も、思わず目を細めた。

屋島にほど近い新川のほとり。2階建ての建物に入ると、入浴やレクリエーションに日帰りで通うお年寄りたちが体操をしたり、休憩したりしているガラス張りのロビーが見える。そのすぐ左側に、病気の回復期で学校や保育所に行けない子どもを短期間預

かる病後児保育室。入り口左手奥に寮のように五つ並ぶのがお産の部屋だ。

感染症などの危険性がなければ、職員はできるだけ子どもを連れ出し、お年寄りと接する機会をつくっている。

「赤ちゃんを見ただけでお年寄りには元気になるし、子どもたちにとっても親以外の大人と接する貴重な機会になる」と代表の山本文子さん。

山本文さんは30年あまり病院の産科に勤務し、1万人を超える出産に立ち会ってきた。どんな親も、子どもが生まれたときは涙を流して喜ぶ。そんな場面を繰り返し見るうちに、その感動を伝えること

命の現場 世代越え

て命の大切さを考えてほしいと、20年前から主に中高生を対象に性教育の講演を始めた。これが評判になり、99年から病院を退職して講演や相談活動に専念していた。

だが出産の現場から遠ざかるほど、命が生まれる現場に立ち会うことで自分自身がいかに勇気づけられてきたかを実感するようになる。現場復帰への思いが募っていたとき、介護ボランティアをしている夫の隆夫さん(63)から「職員は時間に追われてお年寄りとお話する余裕もない」と聞いた。出産の現場には力がある。ならば、介護と出産を一つの場所で行うことで、

人間的に介護を提供してきたか。04年、定年を迎えた同世代の助産師が集まったとき、その構想を話すと「一緒にやろう」と盛り上がった。病院勤務時代、産後の育児にとまどう母親を支えるサークルを立ち上げた経験から、育児支援サービスも必要だと考え、ニーズが高そうな病後児保育もすることにした。

現在「ぼっこ」では、助産師らを対象としたセミナーや、介護ボランティアの講座、子育て中の母親の集いなども開いている。将来は、集いにやってくる若い親とお年寄りが一緒に参加できる催しも開きたいという。

出産の問い合わせは087・844・4103、介護そのほかについてはNPO法人いのちの応援舎(087・843・8252)へ。

「笑った、笑った」。赤ちゃんを抱いて笑顔がこぼれる＝ぼっこ助産院で



「笑った、笑った」。赤ちゃんを抱いて笑顔がこぼれる＝ぼっこ助産院で